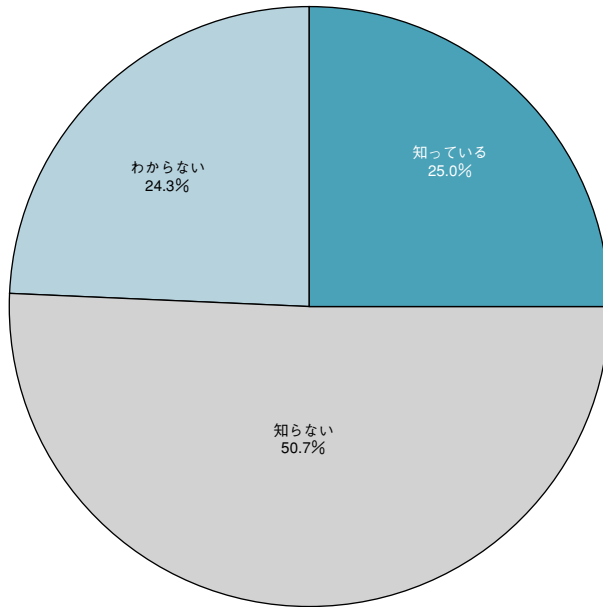


P2P

大多数はP2Pアプリケーションの存在を知らない

資料2-4-19 P2Pアプリケーションの認知 N=2,742

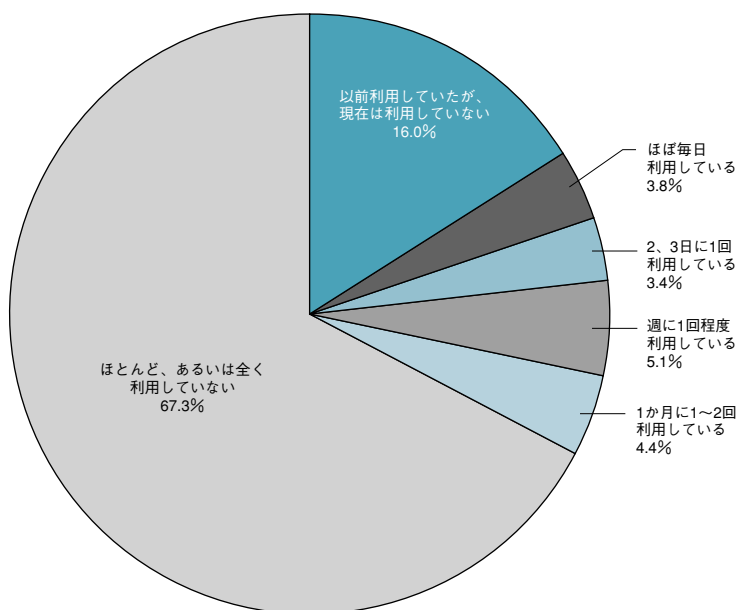


©Access Media/impress,2003

Napsterのサービス終了によって報道が減ったせいか、クライアント同士で直接情報をやりとりするP2P（Peer to Peer）アプリケーションについて知っているのは全体の4分の1だった。ヘビーユーザーがいる一方で、圧倒的多数がその存在すら知らない。

ヘビーユーザーは認知者の10%未満

資料2-4-20 P2Pアプリケーション利用状況 N=686



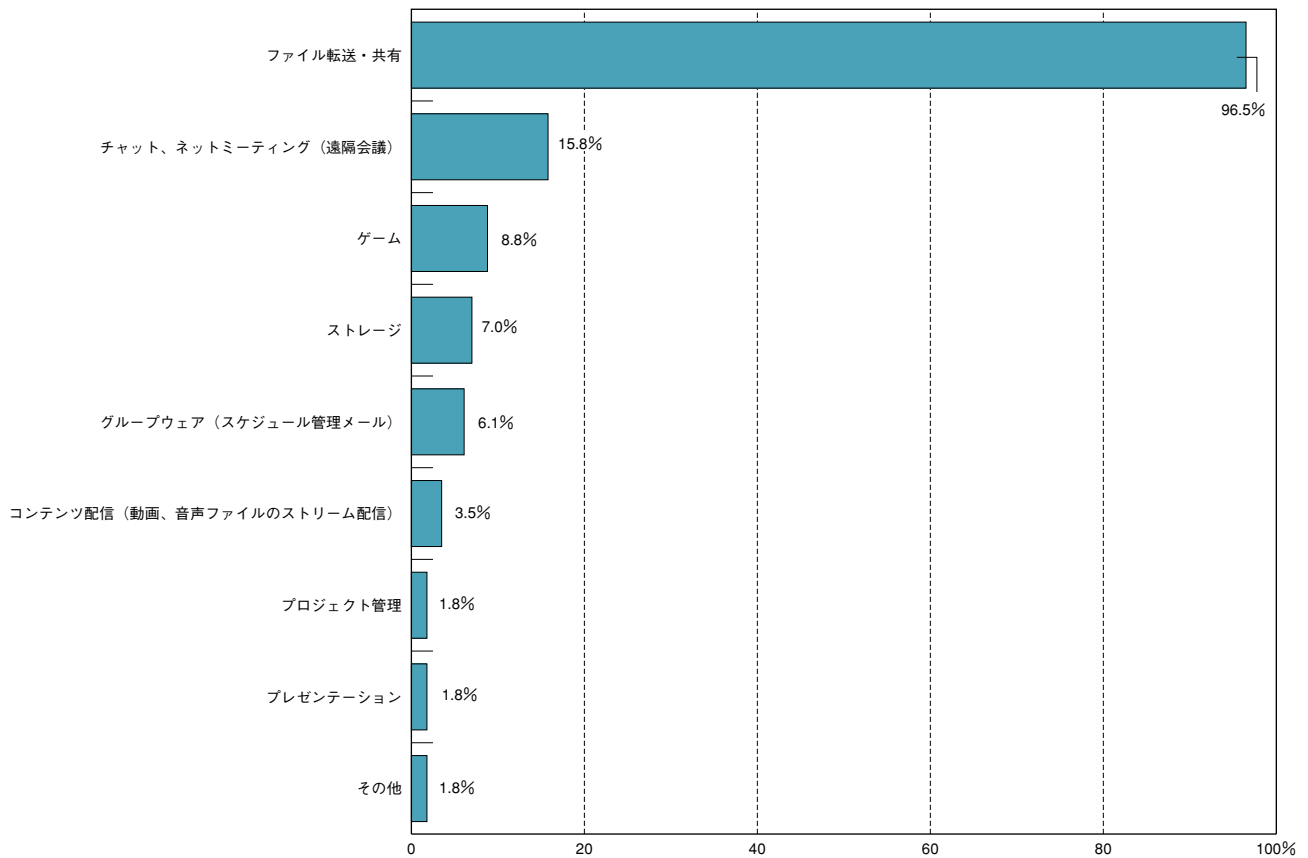
©Access Media/impress,2003

認知している人に利用頻度を聞いた。「ほぼ毎日」「2、3日に1回」など、頻繁に利用していると考えられるヘビーユーザーはごく一部で、全体の10%にも満たない。以前は利用していたが現在は利用していないという人が16.0%にのぼる。

P2P

主な用途はファイルの転送と共有

資料2-4-21 P2Pアプリケーションの用途 N=114



©Access Media/impress,2003

ほとんどの利用者にとって、用途はファイルの転送と共有である。その他の利用は現在のところ付加的なものにすぎない。むしろ、ファイルを転送したり共有したりするためにP2Pアプリケーションを利用しているといえる。

日本の普及状況

個人の利用実態

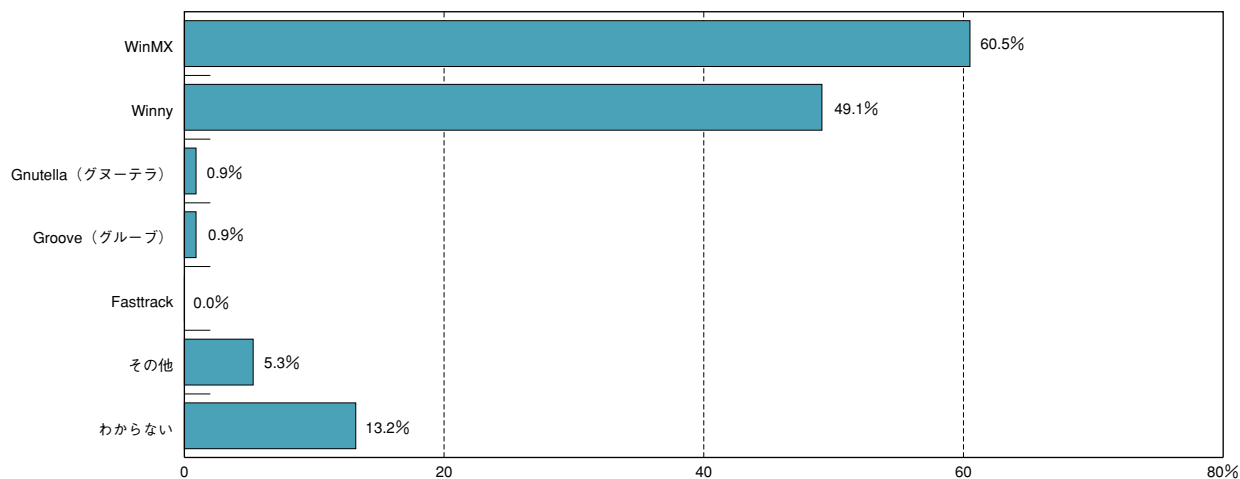
企業の利用実態

海外の普及状況

P2P

WinMXとWinnyが圧倒的人気

資料2-4-22 利用しているファイルシェアリングソフト N=114

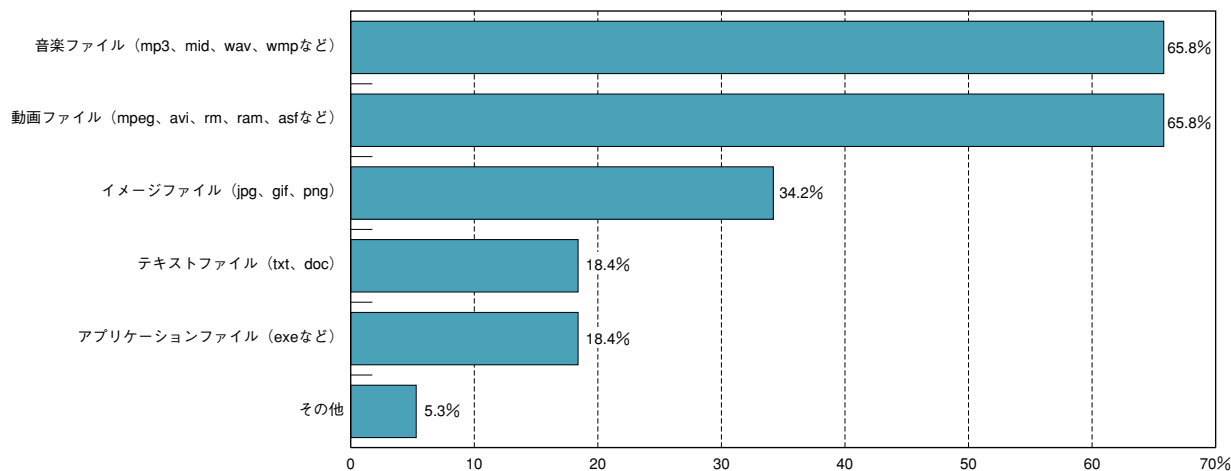


©Access Media/impress,2003

WinMXとWinnyの2大ソフトの利用が圧倒的に多い。検索性や共有方法に若干の違いはあるものの、これらはいずれも、常時接続環境で最も安定しているとユーザーの評価も高い。一方、一時人気のあったGnutellaだが、かつての勢いは失っている。

音楽・動画ファイルの共有がともに65.8%

資料2-4-23 P2Pアプリケーションで共有・転送しているファイルの種類 N=114



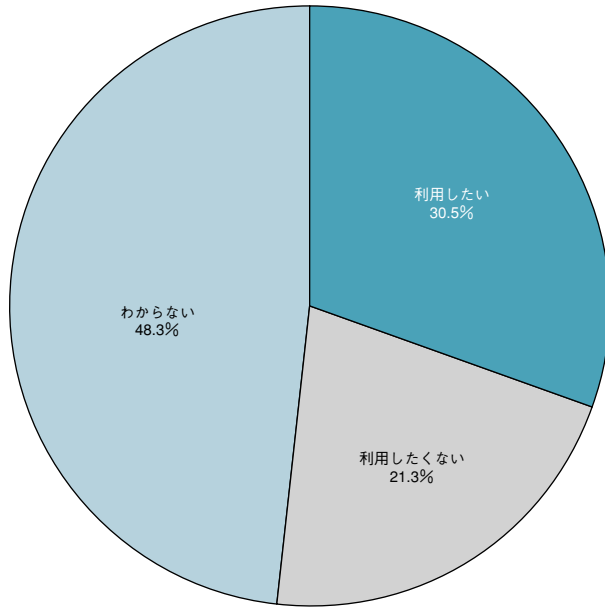
©Access Media/impress,2003

P2Pアプリケーション利用者の65.8%が、音楽ファイルや動画ファイルを共有している。著作権問題と切り離せない分野だけに、これらの利用実態は多方面から大きな関心を集めているが、ニーズが高いことは確かである。

P2P

少数ながら熱烈な支持で今後も一定の人気を保持

資料2-4-24 今後のP2Pアプリケーション利用意向 N=686

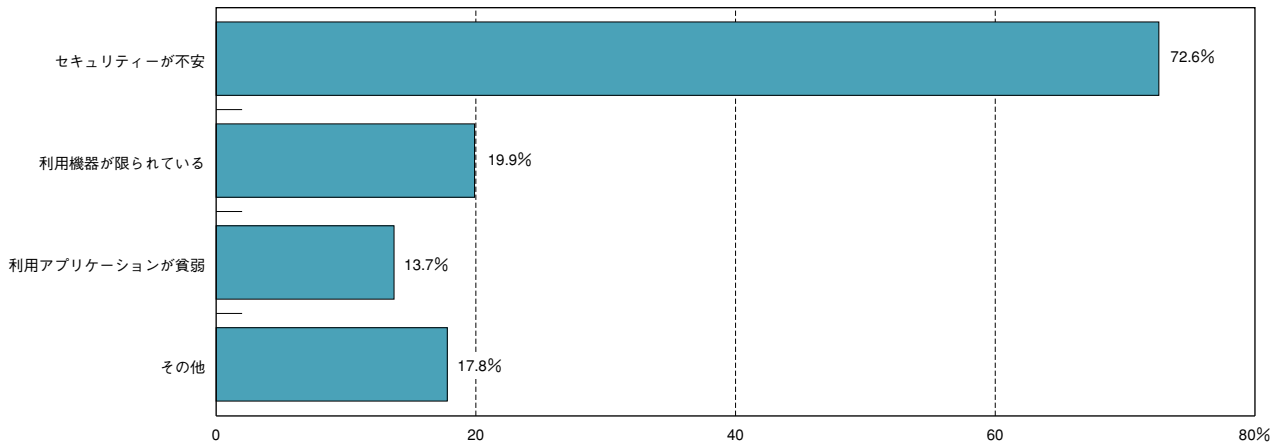


©Access Media/impress,2003

P2Pを認知している人全員に今後の利用意向を聞いたところ、利用し続けたいという回答は30.5%。つまり、現在、母数としてのP2P利用者は決して多くはないものの、今後も常に一定数のヘビーユーザーが存在し続けることが予測される。

P2P利用の最大の壁はセキュリティへの不安

資料2-4-25 P2Pアプリケーションを利用したくない理由 N=146



©Access Media/impress,2003

今後P2Pを利用したくないと回答した人に理由を聞いたところ、ネットワークを介して自らのパソコンにあるフォルダを共有するシステムだけに、未知の他人にコンピュータを見られる不安を挙げた人が多い。利便性の問題を挙げる回答も寄せられた。

日本の普及状況

個人の利用実態

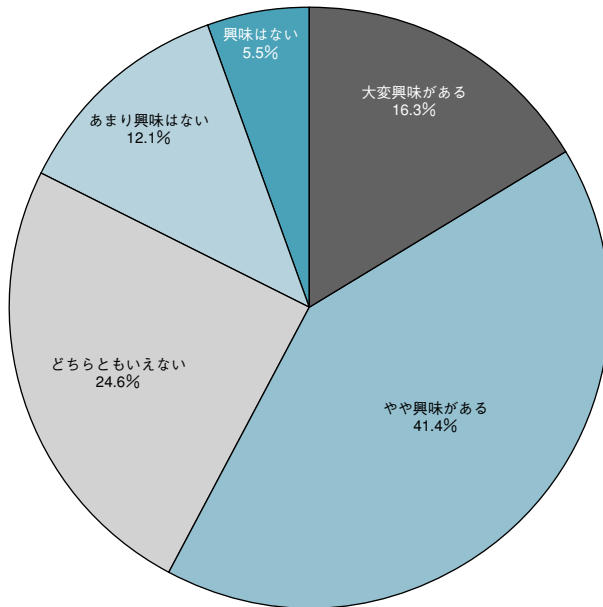
企業の利用実態

海外の普及状況

P2P

ワイヤレス端末でのP2Pに対する関心は高い

資料2-4-26 無線によるP2P技術利用についての関心度 N=686

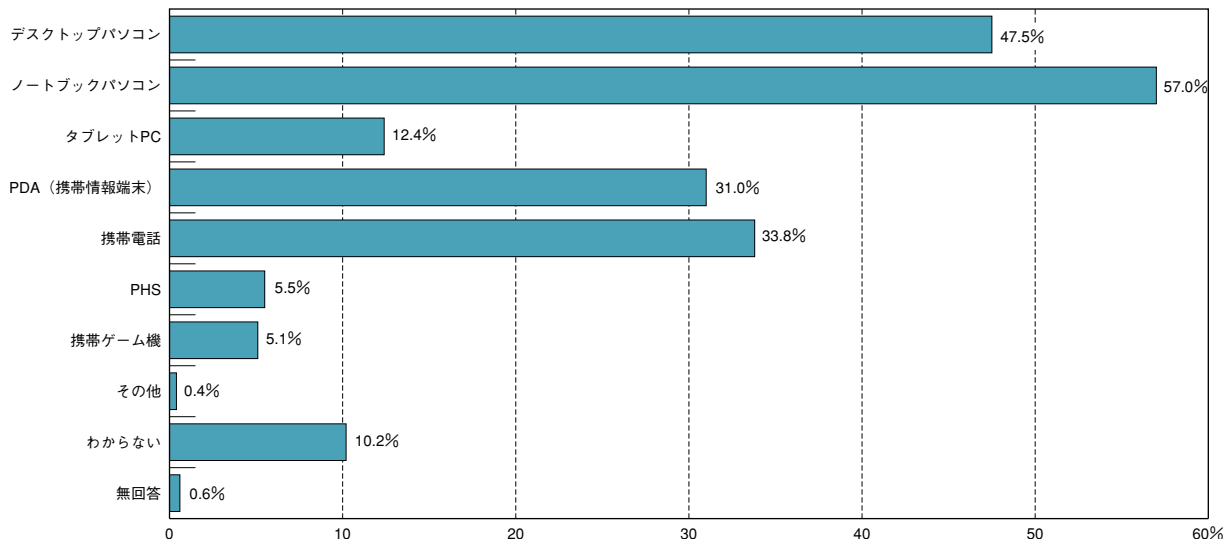


©Access Media/impress,2003

「どちらともいえない」を含めると、少なくとも何らかの興味を示しているユーザーは、全体の4分の3を占める。無線環境で利用できるようになれば、確かに利便性は圧倒的に向上し、用途は広がる。今後の技術の拡充が注目される。

パソコン以外でもP2P利用を求める声

資料2-4-27 今後、P2P技術を利用したいデバイス N=686



©Access Media/impress,2003

日常的にパソコンを利用している環境でP2Pを使いたいとの回答が圧倒的。一方で、PDAや携帯電話など、移動体通信を利用したファイル共有にも大きな関心が集まっている。今後のこの方面への応用が、多様なP2P利用の起爆剤になることが推測できる。



[インターネット白書 ARCHIVES] ご利用上の注意

このファイルは、株式会社インプレスR&Dが1996年～2012年までに発行したインターネットの年鑑『インターネット白書』の誌面をPDF化し、「インターネット白書 ARCHIVES」として以下のウェブサイトで公開しているものです。

<http://IWParchives.jp/>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、データ、URL、名称など)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真・図の作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は掲載されていない場合があります。
- このファイルの内容を改変したり、商用目的として再利用したりすることはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用される際は、出典として媒体名および年号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレスR&D)などの情報をご明記ください。
- オリジナルの発行時点では、株式会社インプレスR&D(初期は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めました。すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接および間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

お問い合わせ先

株式会社インプレス R&D

✉ iwp-info@impress.co.jp